2008年秋・長谷エコツアー報告

事務局インターン生

9月20日21日の両日にわたり、今年で5回目となる長野県伊那市長谷でのエコツアーが行われました。今年は、会員、外部の方、スタッフ、現地スタッフを含め約25人が参加。台風の影響等天候が心配されましたが、当日の朝には、長谷はなんとか曇りの状態まで回復し、予定通り秋の長谷を満喫することができました。

〈1日目〉

車、自転車、電車とバスとそれぞれの交通手段で、まず歌舞伎小屋でもある中尾座で合流。自己紹介を済ませた後、着替えをすませ稲刈りをする田んぼへ向かいました。実際に田んぼにでると、空気がとても透き通っており、綺麗な金色の稲穂がまぶしいほどでした。でも田んぼの中は、まだ前の日の雨の影響で少しぬかるんでいる状態でした。

まず、田んぼの持ち主である中村さんのお父さんから稲の刈り方と縛り方、干し方などを教えていただき、実際の田んぼの中へ。長靴をいくつか借り、稲を刈る人、それを受け取って縛る人、さらにそれを運び干す人と役割を分担し、それぞれの作業を途中交代しながら行いました。

田んぼから帰ると、郷土料理の師匠、食文化研究家の小松照子さんがちょうどおやきを作っているところで、一緒におやきのタネにかぼちゃを入れ、つつみ、焼くところまで行いました。素人なのでどうしてもかぼちゃが外側にはみだしてしまい、不恰好でしたが、味は抜群でした。

食べ終わったところで、秋葉街道普請隊の高坂隊長を先頭に、中尾座から宿である入野谷までを結ぶ古道、秋葉街道散策へ。ロープを伝って歩いたり、丸太の橋を渡ったり、前日の台風で倒されてしまった大木をまたいで通ったりと、50年前に小学校の通学道だったとは思えないような険しい道のりを、隊長の歴史の説明を聞きながら、散策しました。

途中にある石仏の中には、他では見られないようなカワイイ顔をしたものもあり、長谷の歴史の深さにも触れることができました。また、やわらかい土や砂利道を1時間半歩いた後にコンクリートの道を歩くと、いかに普段歩きづらいところを歩いているのかがわかり、その感触の違いにも驚きました。

入野谷まで帰り、温泉で疲れをほぐしたあと、おいしい料理の数々をいただきながら、小松さん率いる「ざんざ節保存会」の皆様に、“ざんざ節”、“きんにょんにょ”を披露していただきました。今年は踊りが残った経緯なども説明していただき、その後、参加者全員で“伊那節”を教えていただきながら踊りました。実際に当時の人々が農作業に明け暮れながらも娯楽の一つとして踊っていた踊りを真似っこで踊ってみると、1つひとつの動きにも意味があり、その深さにも、触れることができました。

〈２日目〉

入野谷で朝食を終え、中尾座にむけて出発する前、長谷観光課長の池上直彦さんが、入野谷の瞑想室に案内して下さいました。長谷は気の世界です。十分気を感じた後は、バスで中尾座に行き、ミニワークショップの開始。今回のテーマは、「日

本の持続性の知恵と秋葉街道」。環境文明21が提案している、8つの日本の持続性の知恵を中心に、持続的な社会を成り立たせるためには、どうしたらいいかをみんなで考えました。ワークショップには、エコツアーの参加者以外にも、長谷の方々にも参加していただきました。長谷にも様々な問題があるようで、「長谷が伊那市に合併されたことで、住民票などの手続きが伊那市で済むため若者が出て行きやすくなった。若者に、この地域の伝統やプライドを伝えていきたい」という長谷観光課の中村徳彦さんのお話は印象的でした。普段のグリーン経済部会などとはまた違った角度からの意見が多く、非常にためになりました。

ミニワークショップの次は郷土料理体験。そば打ち名人の宮下さんの指導で、そば打ちを行いました。宮下さんの手際のいい手つきを見ていると、一見簡単そうに見えますが、いざ自分たちがやってみると、水が多すぎたり、厚さが不均一だったりと、なかなか難しかったです。ちなみにそば打ちというのは、そばを棒に巻きつけて伸ばすときに、そばがまな板をパタンと“打つ”のが由来なのではないかとのこと。さらに小松照子さんの指導で、しそ巻きや酢のもの、また宮下さんがご自身で狩ってさばいた鹿肉などで料理を作りました。

ほとんどが地元でとれた食材で、自分たちで一から作った料理です。普段食べるものに比べて愛着がわき、食の大切さを実感しました。昼食の時間に、今回初めて参加した人を中心に感想を述べてもらいました。どの感想も、とても満足していただけたようで、企画者として、このようにツアーを成功させることができ、とてもうれしかったです。

私は、長谷の方々をとても尊敬しています。なぜなら、彼らは自然を理解し、自然と調和して生きているからです。人間は社会の中に存在し、社会は自然に包まれています。自然を知らずして、持続的な社会を成り立たせることができるとは思えません。それには、まず身の回りのことから知ることが大事なのではないかと、このエコツアーを通して感じました。

参加者の声

僕は、いろいろな所を旅するうちに、地方都市や農村に限らず、日本が将来かかえるだろう様々な問題は、農村・漁村の活性化に解決のヒントが無いかと考えるようになりました。

地方都市では、閉めきったシャッターがずっと続く不気味な商店街を良く見かけます。山あいの農村では、働き盛りの若い人たちを見かけません。このままでは将来持続不可能になります。

今回のツアーはとても良かったです。人間にとって最も重要な食べるということについて知り、また昔の人々の経済と深く関わったであろう旧街道を歩くことができ、いい体験ができました。これをきっかけに、長谷のことをより深く知れるように、できるだけ訪れたいと思います。

（WWF・羽鳥信行さん）

エクステリア業界で営業職をしています。3年程前からHPを見て、いつか皆様の話を直接聞かせて頂きたいという思いから、今回参加しました。

エコツアーでは、インターンの学生さんの努力、環文の皆様の人柄と温かい長谷の方々のおかげで、非常に心地よい時間を過させて頂きました。

過疎化問題、鹿猿などによる食害問題などを地元の方から直接聞けたこと、ローカルな伝統芸能を見てわかったこと、普段お会いすることの無い皆様とお話が出来たこと、日本の伝統的知恵をいかす為の資料を頂けた事が今回の収穫でした。本当に貴重な体験をありがとうございました！今後、私も自分なりに貴重な伝統的知恵を今の社会に取り戻す方法を考えて見たいと思います。

（会社員・藤澤徹也さん）

秋葉街道にかける思い

高坂　英雄　（こうさか　ひでお／秋葉街道道普請隊長）

長谷の山中を通過している秋葉街道は、金沢街道的場宿を起点として、遠山郷を経て火の神さま秋葉神社の参拝に使った信仰の道であった。今は廃れたこの街道を、復活させようという取り組みを始めたきっかけは、長野県旧長谷村の景観基本計画策定委員会の発足だった。

自然の宝庫といわれる長谷で、戦後の山林は木炭生産という生活に欠かせない貴重な収入源だった。

昔は自分たちの歩く道はみんなで道普請（道路を整備する仕事）をする、水田の耕作が始まる前には全員で水路を直す、ともに汗水流すのが当たり前だった。最近では、共同ですることが少なくなり、隣近所でも昔のような近所づきあいは少なくなったが、少なくとも私たちの先祖は、食べるものにも事欠く山村で、少しでもお互い助け合って住みよい村にして行こうという苦労の積み重ねだったと思う。

長谷で国道を走っていても、美しい花を見ることは少ない。自分の庭に花は植えても、道路脇の畑の土手に花を植える人は少ない。しかし、ただ草ぼうぼうの土手でおくより、庭先の水仙を株分けして道端に植えると、やがて花が咲き、自分も他人もその可憐な花を見て心が和む。こんな簡単なことをするだけでも、地域を花の咲く美しい場所にできるはずだ。

生活している環境や景観ひとつとっても、一人一人がちょっとしたことを改めるだけで、改善できることはいくらでもある。周囲の景観とは、目で眺めて心を癒してくれるものでなくてはならない。

長谷に住んで60年。自分があまりにも地域のことを知らないことに気がついた。秋葉の歴史や食料危機（飢饉）の歴史、当時の生活（明治、大正、昭和）の状況を勉強してみて、住民が地域をもっとよく知ってほしいと思うようになった。

秋葉街道を復活させる活動を軸として、自分の地区は自分たちが共同で花を植えたり草取りをしたりして、きれいな地域作をしようと、住民ひとりひとりが気づいてくれる起爆剤にしたいと思っている。

先頃50名余の参加で秋葉街道ウオーキング村内全コースを開催したところ、「いつも周りの景色を車窓からしか見なかったけれど、街道からみた風景に感動した」「木漏れ日の美しさに心が癒された」など、視点を変えれば住み慣れた地域にも、新たな発見があることを、参加者に理解していただけた。

もちろん、今の街道はようやく復活しただけの悪路ばかり。まだまだ歩いて喜んでもらえる状況にはない。物事最初から成功することなどとうてい無理なことであり、こつこつとできることから取り組み、地道に活動を続けることが大切だろう。道普請の作業の都度、弁当にあめ玉などもって参加して、休憩時間などに互いに分け合うほほえましい光景がみられる。人間は孤独に弱く一人では生きていかれない。周りに多くの人がいて何らかの関わりを持ち、信頼関係や相互扶助の精神があって、ようやく自分の生活がある。

日常生活の中でたくさんの疑問を持ち、そこから思わぬアイディアが生まれることが多い。人の話をよく聞いていると、改善のヒントがいっぱいある。

そのためには、より多くの人との出会いを大切にすることが重要だし、よい出会いは自分の人生を好転させる転機にもなる。私にとって秋葉街道はそんな場所である。